

基調講演

「第三の困窮」～ホームレス支援から見たもの～

NPO法人北九州ホームレス支援機構 理事長 奥田知志氏

◆路上で見てきた風景が全国化

本日は、本当に私でよろしいのでしょうかという気持ちでまいりました。私は別に社会保障等々の専門家ではなく、本職は、実は牧師です。明日はクリスマス礼拝ですので終わるとすぐに九州に帰るということになります。

ただホームレスの支援をずっとやっており、来年でもう 25 年になります。四半世紀ですので一区切り、何か行事をしなければならぬかなと思っていますが、お祝いするわけにもいかない。ホームレス支援団体が 25 年活躍しているというのは、この社会があまりよろしくないことの証明でもあるわけですね。それでもたくさんの人たちに支えられてやってきましたので、何かしなければなりません、呼ばれたほうも困ると思います。25 年おめでとうと言っていいものか、ご愁傷さまと言っていいものかわからない状況ではあります。

実は、炭谷理事長をはじめ済生会の皆さんには本当にお世話になっております。毎週金曜日が炊き出しで、昨日九州も大雨でしたが、雨の中、夜中まで炊き出しをやっていました。昨夜は済生会の八幡総合病院の先生たちが来られ、路上で診療をしてくださいました。本当に助かりました。炊き出しは雨だからといって中止にできません。連絡できないので昨日も雨の中、ホームレス状態の方々が何十人も並んでいる、そんな中で済生会の皆さんが診察をしてくださいました。なでしこプランということで、ここ数年、本当にお世話になってます。また明治学院は、私の息子が今お世話になっていて、足を向けては寝られないという状況です。

私の経験は本当に路上の小さな、小さな枠組みなのですが、正直申しましてこの 25 年、路上で見てきた風景が今、全国化しているという直感を持っています。たとえば路上の現状で一番深刻なのは、路上で亡くなった方々の 8 割ぐらいが無縁仏になることです。引き取り手のない遺骨、遺体です。私の教会の納骨室には引き取り手のないご遺骨が、何十と並んでいる状況です。幸い牧師でありますので、お葬式はしています。2 年前、NHKが「無縁社会」という特集をやりました。朝日新聞がその後、「孤独の時代」という特集を組

みました。この無縁とか孤独は非常に大きな問題になってきている。

「無縁社会」で取り上げられたのは、全国で年間に 3 万 2000 人が孤立死、孤独死、もしくは引き取り手のない遺体として警察に届けられたということでした。3 万 2000 人というのは非常に大きな数です。去年の大震災でお亡くなりになられた方、もしくは行方不明になられた方は 2 万人を少し切っている。比較するのは適当ではないかもしれませんが、年間 3 万人以上の孤独死、無縁死が非常に大きな数であるとわかっていただけだと思います。

私が 18 歳、まさに大学生のときに大阪の釜ヶ崎という街に行き、それがきっかけで結局ホームレス支援をずっとやることになるのですが、その大阪の釜ヶ崎で見ていた労働者の姿、たとえば「日雇い殺すにゃ刃物はいらぬ。雨の 3 日も降ればいい」。日雇い労働者は、雨が 3 日続くと日銭がなくなって路上に出てしまう。そうするとたとえばこういう寒さの中で体が悪くなる。さらに仕事に行けなくなるという悪循環の中でどんどん死に追いやられていく。日雇い労働者という非常に不安定な就労の人たちが全国の寄せ場と呼ばれていた街、東京でいうと山谷地区になりますが、横浜では寿、そういうところで見られていた労働形態が、90 年代の半ば以降、やはり日本中に広がっている。

◆「完全野宿者層」は減少だが…

今、総労働人口に占める非正規雇用の割合は 35%になりました。3 人に 1 人が非正規です。厚生労働省のデータを見ると、24 歳以下の労働人口でいうと 49%が非正規です。そうすると、大学卒一括採用、終身雇用という一つのパターンは、大きく崩れたと言わざるをえません。ですからかつて日雇い労働者の街で見られていた光景が、日本中に広がっている。日本の労働人口が 5000 万~6000 万人ぐらいとして、35%ですから 2000 万人以上が非正規雇用になるわけです。この数字にはパートなども入っていますから、全てとは言えませんが、非常に多くが不安定な暮らしの状態にある。

そんな中で日本のホームレスは何人かという、9500 人ぐらいです。これは 10 年前に最初に国が全国調査をした 2 万 5000 人から比べると半分以下になっています。ホームレス、実際に外で寝ている人の数は、国の調査によると非常に減少していることになります。昨日、北九州のパトロールでも、かつて市内に 500 人いたホームレスが昨日夜の出食で 100 食ちょっとですから 5 分の 1 ぐらいになっています。いわば完全野宿者層というか、小屋がけをして、そこにずっと定住しているという野宿者層は確かに減りました。

かつて、80年代の総中流意識といわれていた時代、終身雇用制がベースになってきた時代は、いわゆる中流層と言われていた部分とホームレス層はかけ離れていたと思います。しかしこの二十数年間の間に、実はその安定した雇用層とホームレス層の間に、非正規雇用というところが2000万人現れた。そのうちホームレスにごく近い層から、ずっと上の終身雇用にごく近い層までいるとして、1%はホームレスにごく近い。今日は仕事があるけれども明日はどうなるかわからない。たとえばネットカフェを転々としている。そういう層が非正規雇用の1%を占めるとしたら、それだけで20万人になるわけです。路上層が9500人、1万人を割っている状態で、しかしそのすぐ上に1%、1%という根拠は何もなくて単純に100分の1にしかたけですが、その20万人ぐらいの規模の、いわばニアホームレス層と言いましょか、何かのきっかけで即、下に落ちてくるという人たちが現れている。

今はそういう時代です。私がかつて路上で見てきた、一部で見られてきた、もしくは寄せ場というところに非常に限られて現れていた現象が全国的になっていることは、やはり事実だと思います。

◆支援機構の三つのミッション

私たちのホームレス支援機構では、ゴーイングホームデーというイベントを行っています。毎年、自立したオヤジさんたちとボランティアが一緒になって地元の大学の講堂を借りて運動会を開く。これがなかなか楽しい。うちの職員も入れ、総数で300人ぐらい。大運動会です。朝から晩まで運動会をやっていると疲れるので、午後からは文化祭、最後は全員で炭坑節を踊って終わる。

私たちの活動は1988年からです。NPOの正会員として登録している人が120人、フルタイムのスタッフが70人、寄付で支えてくださっている全国の賛助会員が850人という組織です。

私たちの使命は、①ひとりの路上死も出さない②ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を③ホームレスを生まない社会を創造する、この三つです。NPOにおいてミッションを掲げることは非常に大事です。このあたりがあいまいになるとだんだんと事業のみに走っていったり、行政の下請け組織になってしまったりします。

この三つのミッションは、実は二つに分類できます。①②のミッションは、対個人です。困窮者支援団体ですから、まず目の前の困っている方にどれだけ支援ができるか、非常に

大事なことです。ボランティアも職員も、個人との関係でやっていく場面が多いですから、ときにはしんどい思いもしなければなりません。

講演会に呼ばれて、主催者から「ホームレス状態の方々を社会に復帰させる支援活動をしている NPO 法人の代表で奥田という人が今から話します」と紹介されることがあります。通常は「そうです」と言って話し出すのですが、ときどき虫の居所が悪いと、立つなり「社会復帰させると紹介を受けましたけれども、復帰したいような社会ですか」と。

この社会が健全でまともであるなら、そこからドロップアウトしてきた人たち、個人の問題を抱えた人たちには、励まし、応援しながらもう一度社会に戻っていただく。しかし、もしこの社会そのものがホームレスを生み出しているとするならば、社会そのものをどうとらえ、もしくはどう創造、再創造するか、これがやはり困窮者支援のテーマになっていなければならないと私は思います。

そうでないとゆがんだ社会の補完物になっていくわけです。社会のゆがみから生み出される問題を NPO などが必死になってカバーしている。しかし大元の社会自体が変わらないならば、NPO はいったい何をやっているのかと問われるわけです。ですから私たちがミッションで掲げる③のホームレスを生まない社会の創造は、対社会です。

困窮者支援には二方面の戦略が必要です。困窮者支援というと、どうしてもこの人をどうするかというところに一点集中するし、また、そこができないといくら社会を変えようとか革命を起こそうといっても、それはつまらない話で終わるわけです。目の前のこの人をどうするの、今日行くところがない人をどうするのと、そこに必死になって関わらない限り何も始まらないのですが、でもその問題が社会そのものから生み出されているとするならば、そこに対する戦いを構築できないのなら、それこそ問題ではないかと思います。だから困窮者支援には、対個人の関わりと対社会の関わり、この二つを必ず考えておかないで対個人のみだとおかしくなるのではないか。そんなふうに思ってやってきました。

◆困窮者問題は個人だけの問題か

そもそも対個人と言っても、野宿者問題や困窮者問題は本当に個人だけの問題か。炊き出しに並んだ人数から北九州市におけるホームレス人数の推移を見てみます。1988年の活動開始から92年あたりまで50人ぐらいで推移しています。93年から100人ぐらいに上がり、97年まで100~140人で推移しています。これは第1段階で、50人ぐらいから100人に跳ね上がったというのは皆さんご存じのとおりバブル崩壊等々で92~93年あ

たりから全体が非常に悪くなりました。

しかし次の波は97～98年で、数が跳ね上がります。97年は一晩に並んだ最高人数が142人でした。翌年は236人で、一気に100人アップしました。そのあとホームレスはどんどん上がっていき、2004年には一晩で457人がお弁当をもらう。当時500食以上炊き出しをやっていましたから、大変でした。夏場になると最初につくったお弁当が最後のお弁当ができあがるころに腐り始めるので、タイミングを見計らって配らなければならない。そんな時代がつい8年前、2004年の話でした。

私が注目しているのは、97～98年にかけての変化です。貧困問題、困窮問題が個人の問題だ、極端な話、その人が怠けたのだとか、もしくは北九州でもよく言われたのですが、好きでホームレスをやっているのでしょう、管理社会がいやになってホームレスになったのでしょうと。そうすると対社会の問題ではなくなって、対個人の問題だけになってくる。

でもこの97～98年にかけてホームレスが一気に上がる背景には、たとえば北九州は142人から236人になりましたが、同じ年に全国の自殺者数が97年2万4391人、98年が3万2863人。自殺が3万人を超えたのも98年です。ホームレスが急増したのも97～98年にかけてです。

では97年には何があったのか調べますと、北海道拓殖銀行、山一証券が破たんする、三洋証券が倒産するとか、アジア全体が経済不安になっていく。それと同時にそれまで貿易にせよ、金融にせよ、保護的な政策をやってきた日本が、自由化しましょうと。当時はやった言葉ではグローバリズムで国際的な競争社会に打って出ましょうと言いました。金融機関においては、護送船団方式という言葉が出てきていました。政府が干渉しながら金融機関同士お互いを守る。しかしこれからはもう自由にしますよと言った途端に、北海道拓殖銀行は北海道開拓のときに政府がつくった銀行ですから、いわばほとんど直系みたいな銀行ですが、そこがつぶれるという事態に至ったわけです。

◆非正規雇用、困窮者、自殺者…

構造改革、規制緩和、競争社会、小さな政府、そして実は90年代半ばあたりから、先ほど言いました非正規雇用問題の入口が開いてきます。85年に非正規雇用、つまり派遣法が通り、当時は専門職の派遣のみを規定した法律でしたが、90年代後半、1999年に派遣法が原則自由化される。2000年に入るとまさに小泉構造改革等々で規制緩和、競争社会にどんどん入っていく。こういう中でホームレスと自殺が急増。この十数年間、3万人を突

破し続けた。そのきっかけの年が、まさにホームレスが急増した年とまったく同じです。そうなるも果たして個人の問題かということが問われてきます。

ではわれわれが支援の現場でずっとやってきて、一番大事なことは何か。「見立て」ということです。困窮者、ホームレス、野宿状態の人たちの問題は何か、何に困っているのかをどう見立てるか。これはお医者さんの世界でもそうだと思います。そのときに私たちは、二つの見立てがあると考えてきました。

野宿状態の人には二つの問題がある。一つは、住居がない、食べ物がない、着るものがない、病院に行けない。こういう問題に対して私たちはハウスレスだと言ってきました。もう一つはホームレスですが、ハウスレス、ホームレスの区分も、昨今は本当に多くの人言うようになりましたが、北九州は、最初のころからこの二つにテーマを絞ってやってきました。

ハウス、つまり住むところに象徴される経済的、物理的困窮に置かれているということです。ですから炊き出しから始まって、昨日の夜も雨の中テントを建てて古着を配る、毛布を配る、済生会のお医者さんが来て体を診てくださる、薬も配る、そういうことをやりました。そこからアパートの設定に行き、再就職の支援を行います。

北九州市内だけで言うとホームレスで自立した人は 1500 人を超え、福岡、下関でもやっていますので、全部合わせると 2200 人ぐらいになります。自立の達成率は 93%。100 人挑戦すると半年の自立プログラムで 93 人が自立していく。

もう一つ力を入れているのは自立の継続率です。アパートにいったん入って、そのままずっとアパートで暮らせるかということが大事です。そうなるも地域生活におけるケアの問題が非常に大きくなりました。いま生活継続率は 95%です。それでアパートに入ったときに、ともかくアパートに入って良かったねという話になるのですが、訪ねて行くと、部屋はきれいにされているし、たとえば台所に行くとお味噌汁などをつくっていて、あのオヤジさん、こんなことをするんだとちょっと驚いたりします。

◆部屋にポツンと一人、オヤジの姿

しかし、良かったですねとアパートで話をし、そしてこのごろ仕事にも行っているんだという話をされる。しかし、ではまた来ますと言って部屋を立ち去るときに、ふっと部屋の中を見ると部屋の中にポツンと一人座っているオヤジさんの姿が見えるわけです。その姿が、駅の通路で座っていた日の姿にかぶって見える。何が解決できて、何が解決でき

ていないのかということ活動を当初から問われていました。

確かにアパートに入ることは大前提で、就職するにしても何をやるにしても、それがないとスタートが切れませんので、それが第一です。路上のときは、畳の上で死にたいとおっしゃる。これはドラマのセリフみたいですが、本当によく聞きます。私はもう何人も路上で亡くなった人を見てきましたし、また自ら命を絶った人も見てきました。ブルーテントの中で、夏場何カ月もたって見つかったという人の姿も見てきました。人が路上で一人で死んでいくのは許されないことだ、それを何としても阻止するというで二十数年やってきました。

しかし、畳の上で死にたいと言っていた人が、畳に上がる、アパートに入る、ああ、これはもう俺は安心だと言うかと思うと、次は、俺の最期はだれが看取ってくれるだろうかという話になる。畳だけではない。家族がいない、心配してくれる人がいない、心配する相手がない。いわばホームと呼べるような関係性を失っている。これがもう一つの問題、ホームレスです。

かつては家族や地域、もしくは会社にせよ、いったん働くと30年、40年というスパンでお付き合いが始まる。そういう日本の経営は、家族的経営と言われたような戦略を持っていた。それがもともとホームの機能を果たしていた。単なる小さい意味での家族というだけではなくて、いわば自分のことを知ってくれている人、心配してくれる人、もしくは自分がその人のために心配する、そういう関係が失われてきている。これが無縁社会、孤独の時代という中で非常に大きくなってきています。

去年あたりからは、単身者の問題でもなくなって、実は兄弟とか親子で孤立死したというケースも出始めています。いったいどういうことか。

このあたり、「助けてと言えない30代」というNHKの「クローズアップ現代」の特集が、ものすごい反響があって、「クローズアップ現代」が珍しく2回シリーズでやりました。あのときの取材が北九州でした。そのとき30代の青年が餓死しました。部屋の中からは兄貴に向けて「助けて」と一言書いた手紙が出さないままで見つかった。彼は生活保護の窓口にも行っていたのだけれども、結局、申請をしなかった。

◆関係性が失われた無縁の時代に

皆さんご存じのとおり、北九州は生活保護問題、水際作戦、さまざまな「闇の北九州方」と呼ばれた。いまは北九州の名誉のために言っておきますが、改善されています。路

上からの保護申請も認めていますし、即日貸付もやっています。だから北九州の生活保護問題はずいぶん変わってきているのですが、かわいそうに北九州の保護課の人はいまだに言われています。

ただその30代の餓死が起こったのは、実は「闇の北九州方式」と言われた2007年の問題ではなくて、2009年に起こっています。2009年は、実は市長も替わって、生活保護の形態もどんどん変わって、全国からもマスコミからも徹底的にたたかれて、北九州市が保護のかたちを変えた、その後のことなのです。それでNHKがああ死はいったい何だったのだと調べていくと、今の若年困窮者の中に「助けて」と言えないという面があるのではないかということが出てきました。

これは文藝春秋から『助けてと言えない』という本になって出ています。私は書いていませんが、中に登場します。第4章あたりに「奥田知志の戦い」とか書いてありますが、僕は全然原稿を見ていなくて勝手に本にされていましたから、妙な関西弁をしゃべる男が出てきます。書いた人は関西の人ではなかったのですが、この関西弁は間違っていると思いながら読みました。

やはり無縁の存在は非常に大きいとわれわれは考えています。野宿者の問題、もしくは困窮者全体の問題の中に、ハウスレス性、ホームレス性という二つの問題があります。ですから支援の両輪ということで言うと、経済的困窮やハウスレスの問題に関しては、アパートが必要だとしたらアパートに入るためには、連帯保証人が必要だ。仕事をするには携帯電話が必要だ。その人には何が必要かということを考える。でももう一つのテーマは、この人には今だれが必要か。この何が必要かということと、だれが必要かというこの二つの問いに同時に答えられる支援システムを構築することが、この24年にわたる北九州のホームレス支援の現場の課題でした。

では、ホームレス問題は本当に路上の人だけの問題なのか。まさに今日、その路上の問題が全国化しています。私はその兆しみたいなのを今から二十数年前のある事件で知りました。北九州市内でホームレスの男性のところに中学生が自転車に乗って襲撃に来る。今年は大阪でひどい襲撃事件がありましたし、各地で起こっています。北九州も今年も小学生の襲撃事件が頻発しました。この対応で市のほうともいろいろ動いたわけですが、実は二十数年前から襲撃事件は起こっています。

◆家はあっても帰るべき家庭が…

私が最初に経験したのは、90年か91年の襲撃事件でした。夜中の1時、2時に中学生がホームレスを襲う。それがどんどんエスカレートして、最後は段ボールハウスの外からブロックを投げ込んでいた。もう命にかかわることで、当事者のオヤジさんは、もうこれ以上やるとけがではすまないと本当に嘆いていた。そのオヤジさんは、自分の孫みたいな子どもたちからやられるのはつらいと言っていた。人間としてのプライドを相当傷つけられた。しかし最後に「でも奥田さん、考えてみたら夜中の1時とか2時に自転車に乗ってウロウロしている中学生は、家があっても帰るところがないんじゃないですか。親はいるけれども、だれからも心配されていないのではないか。帰るところのないヤツの気持ち、だれからも心配されていない人の気持ちは、俺はホームレスやからわかるけどな」と言った。

私は中学生とホームレスは違うと思っていました。中学生は当然家に住んでいる人、ホームレスは外で寝ている人、中学生は家族がいる人、ホームレスは一人ぼっち、襲っている側と襲われている側、全然違うと思っていた。でもこの野宿の、もしくはホームレスのオヤジさんから言わせると、家があっても帰る場所になっていないのだったら、もしくは親がいてもだれからも心配されていない、それはホームレスではないかと言われた思いがしました。

二十数年前に起こったこの襲撃事件で、ハウスレスとホームレスが違う。つまり家に住んでいてハウスレスではないとしても、もはや中学生がホームレス化していつている時代に子どもたちは生きているのだと思ったのです。この路上の問題だけではすまないという予感がしたのが二十数年前。あれから20年たって、12~13歳だった当時の中学生が、ちょうどフリーター世代、35歳前後ぐらいになっている。その年代層が今、路上に出てきている。そういう非常に皮肉なことになっています。

こういうふうに見ると、やはり経済的貧困や困窮、家に住めないという問題とともに、もう一つ、ホームがなくなってきているという、そのところをどうするかが非常に大きな問題だと思っています。

◆借金時効は誰が教えてくれる？

多重債務問題もあります。ホームレスの自立支援センターの開所当初、6割が多重債務の問題を抱えていました。これを解決しないと自立できないということで、市内の法律家の皆さんにお願いして、ホームレス支援法律家の会をつくっていただき、これは今も活動

しています。

ただ、多重債務の究極の解決手段は、裁判所に破産申請をして、そして裁判所から免責処分を受けて借金を帳消しにしてもらうことです。しかし、免責処分は何回も繰り返していると社会自体がおかしくなってしまうので、裁判所は今は免責7年。私が始めたころは免責10年でした。つまり1回免責を出すと、あと10年間はこの人に関しては出しませんというルールを持っていました。ホームレスになるような状態ですから、私はとっくに免責を受けたうえで、さらに多重債務を抱えていると想像していました。ですから法律家の会ができたことは喜びました。

しかしふたを開いてみると、問題解決困難ケースは0件、ほとんどは時効で終わりました。借金は債務の承認から5年たつと時効の援用が使える。刑法のように自動的に時効にはなりません。今日の0時で時効ですということにはならないのですが、債務の承認は、最後に支払った日が一番わかりやすいですが、自分がこの人との間で債務があることを承認してから5年たつと、時効の申し立てができるのです。センターを100人ほどが利用するのですが、その6割、60人ぐらいの多重債務、そのほとんどが実は時効だった。

中には15年間ホームレスを続けていたおじいさんがいて、理屈で考えれば最初の5年で時効が成立するわけです。そのオヤジさんは弁護士さんに手紙1本書いてもらったら、時効の援用で債務はなくなって、消費者金融からあなたの債務はありませんという通知が来た。そうするとそのオヤジさんにとって、最初の5年はともかくとしても、後の10年間はいったい何だったのか。弁護士さんも何だったんでしょうねと言いながら、15年にわたるホームレス生活を振り返っている。

多重債務は非常に大きな問題で、特にヤミ金融などになると非常に大きなリスクとなって、取り立てもやくざなどが入ってきて大変です。しかし、多重債務で自殺に追い込まれるとよく言われますが、私は多重債務は人を殺す力など持っていないと思います。多重債務はどんなかたちであれ、法的に解決ができるのです。

ではなぜ人は死んでいくのか。問題は無知と無縁です。つまりその多重債務問題で言うと、ホームレスになる前に地域で解決できたのではないか、それを結局一人思い込んでホームレスになって借金から逃げて15年間もホームレスをやっている。振り返ってみると、もう10年前に時効は成立している。これはいったい何なんだ。そうすると、そもそも地域で解決できたのではないか。すなわち野宿状態に陥らずに済んだのではないか。結局はもう一方の経済的破綻とともに、無知と無縁が非常に大きな問題として人の命を奪っている

のが現実なのではないか。

困窮概念について私は素人なりにこう考えています。戦後の日本の社会保障制度を考えると、一番大きな困窮概念は経済的困窮と身体的困窮だったのだらうと。いざ経済的な困窮に陥ったときにどうするのか。ハローワークをつくりましょう、年を取って働けなくなったら年金制度でカバーしましょう、もしくは最終的には生活保護でカバーしましょう。身体的困窮に関しては、介護・国民健康保険制度から始まる様々な制度、障害福祉や老齢福祉、最近では介護保険制度をつくりました。しかしこうした制度が、ある程度機能してきたのは、実は困窮者の周りにその制度につなぐ人たちがいたからではないのかと思います。

◆社会と困窮者をつなぐ人はどこに

具体的には、よく言われる三つの縁、地縁は地域の縁、血縁は身内、社縁は会社、その会社というのは、日本のセーフティネットの中で非常に大きな役割を果たしてきたと私は思います。たとえば私はサラリーマン家庭だったのですが、夏休みに家族で遊びに行くときは、だいたい親父の会社の保養所でした。健康保険も会社の健康保険組合でしたし、様々なことを終身雇用制をベースにした会社がカバーしていたということがありました。しかしこれが崩れていって無縁化していったわけです。

そうなるといくらしい制度ができて、制度につながらない人たちが出てくる。先ほどの多重債務問題はその典型です。法律家がいるにもかかわらず、そこの窓口に行かない。法テラスがあってもそこの窓口はどう行っていいかわからないという問題が出始めました。そうすると、第1の困窮が生活的困窮、第2の困窮が身体的困窮であるとするならば、第3の困窮として関係的困窮を頭に入れて制度設計をしないと、これからはどんなに単発の社会保障的な、第2のセーフティネットと言われるようなものをいっばいつくったとしても、それがうまくコーディネートされ、活用されると仕組みにはならない。自己責任論で本人が考えてやってくれと言っても、もしくは家族、地域が動けと言っても、家族も地域も会社も非常に脆弱になっている。この第3の関係的困窮を頭に入れた制度設計をしないとまずいのではないのか。

今、議論されている生活支援戦略は、多少なりともこのことをベースにしていると私は信じていますが、政権が替わり、この後どうなるのか。生活支援戦略自体がもうなくなってしまわないのかという気もしていますが、このところをどうするか。そこには、第

4の縁を想定せざるを得ないだろう、と。

しかし、地縁・血縁者がもうだめだから第4の縁に行きましょうという理屈にはならないと私は思います。そんなに単純ではないと思います。非常に弱くなっているけれど、やはり地縁も血縁も社縁もあるのです。助ける人と助けられる人は、実は相互的な関係にあるので、単純に困窮者を助けるためにどうしたらいいかだけではなくて、そのために一肌脱ぐ地域の人がいれば、その人は人を助けることによって元気になっていくわけです。

◆既存社会支援をコーディネート

そういうことを考えると、地縁・血縁者はもう古い、新しい第4の縁に行きましょうではなくて、第1、第2、第3の縁に替わる第4の縁ではなくて、第1、第2、第3の縁、さらに既存の社会支援をコーディネートするような第4の縁、うまく家族には家族としての出番を果たしてもらいましょう。生活保護の改定の中で、どうも身内の責任だけに押し戻そうとしているのですが、そんなことは無理です。そんなことができていたらもうとっくに身内が助けています。そうではなくて、たとえば身内ができる範囲で身内にかかわってもらおうというコーディネートをしないと難しいわけです。ですから第4の縁を私は伴走型支援だとしています。

しかもハウスレスとホームレスの関係は、二つの問題があるのではなくてお互いに絡み合っているからややこしい。20年前、ハウスレス、ホームレスと言いだしたときに、ホームレスがどうも精神的な問題だと周りの人からは取られていました。あの北九州は牧師さんがやっている運動だから、そういう人の心の問題を説いているのだとよく言われていました。それはある意味そうなのだけれども、ただこのハウスレスとホームレスは、二つの問題があるのではなくて、実はものすごく絡み合っていて、1人の中にまさに一体化した問題としてある。

地震の前に私はNHKに呼ばれて、「日本のこれから」という番組に出ました。4人ぐらいゲストのうちの1人で、三宅民夫アナウンサーが生放送でやっていました。

私の出番は最後の15分ぐらいで、三宅さんが振るから無縁社会の話をしてくれということでした。しかし生放送で、相当時間が押したところで私に来たので、あまり十分に話さないまま、いよいよラストあと1分ぐらいになった。会場席から手が挙がって、ある男性が「そんな縁だの、ホームだの言ってもお金がなかったら友だちとも遊べないじゃないか。金がなかったら人との縁なんて結べないじゃないか。金をくれ」という話をしたら、

時間が来た。三宅さんが「それでは皆さん、さようなら」。その日が「日本のこれから」の最終回でした。それでシリーズが終わりました。三宅さんと渋谷の店で朝まで飲み明かしてお互いに荒れていました。何なのだ、あのラストシーンは、と。

◆貧困のスパイラルが

でも彼が言ったことは事実です。経済的困窮というものが関係をどれだけ阻害しているかは明らかです。たとえば現在生活保護をもらっている世帯は213万人といわれていますが、その世帯の中の25%は貧困スパイラルを起こしている。つまり親の世代も生活保護、子どもの世代も生活保護で、4人に1人は親子で生活保護が引き継がれている。それはそうです。たとえば子どもの教育にしても、公立に行ってもいい、私立に行ってもいいというチャンスに恵まれた子どもと、私学には行けないという中で暮らしてきた子どもたちがいるわけです。

日本では昔から金の切れ目が縁の切れ目と言われてきました。だから貧困問題、特に経済的な貧困問題をどう解決するかというのは実はこの縁の問題にすぐに跳ね返ってくる問題で、無縁化をものすごいスピードで進めたのは、実は貧困問題でもある。貧困状態が社会的なチャンスを阻害している。社会排除は、まさに困窮の問題なのだ。このことはやはりきちっと押さえなければなりません。ですからハウスレスの問題とホームレスの問題は、ハウスが原因でホームが結果になっているということでもあります。

でも私は三宅さんに言いました。「あと2分あったら、僕、あれに反論していたんやけどな」と。僕は現場で野宿の人やいろいろな人の話を聞いていて、逆もまた真なりと思うケースが結構あります。あなたは何でホームレスになったんですかと支援するときに必ず聞きます。そうするともう7割方が倒産したとか、リストラだ、そもそも非正規だったとかで仕事がなくなった。でも案外多い2番目、3番目の理由は、妻と離婚したとか、子どもと別れたとか、お母ちゃんが死んだとか。

◆人は何のために働くのか

たとえばある男性は、もう本当にやんちゃ坊主ですーっと放蕩息子をやってた。家の金をバーッと取っては、何カ月か出て行って帰って来ない。帰ってきて何カ月かいたら、またお金を持ってどこかに行ってしまう。あるとき帰ってきたら母親が家にいない。兄弟に聞いたら入院していると。そして行ってみたらもう末期のがんだった。母親はそのまま

死んでしまった。

彼曰く、こんな俺でもいつか親孝行をしようと思っていた。母親をずっと泣かせてきたのだけれども、定期的に帰って母親に叱られることが、実は自分にとっての一つの支えになっていた。それがスポンと離れた瞬間に、彼はホームレス化する。そんな甘えた話はないと思われるかもしれませんが、これは事実なのです。

だから逆に言うと縁の切れ目が金の切れ目、つまり人間は働くときに、金のために働くとは言わない。ある講演会で話していて、「質問！」と手が挙がりました。その人は今の僕ぐらい。今 49 歳ですから、50 歳ぐらいのちょうど働き盛りの人でした。その人が、「奥田さん、ホームレスを支援するなんて言っているけれど、だいたいあんなやつらを支援してどうするんだ」と、非常に厳しい意見でした。自分の家の隣にもホームレスが昼間からひっくり返って寝ている、あんなやつを支援してどうするんだと。彼曰く「情けは人のためならず、あんた知ってるか」。

僕は心の中で、その言葉はよく知っているけれど、使い方はたぶん間違っていますよ、それは人前で大きな声で言わないほうがいいですと思いながら、「おっしゃることはわかります。情けをかけて甘やかすなど言いたいのでしょうか」。あの言葉は、自分のためにいずれ返ってくるよという意味ですけれども、彼はホームレス支援は甘やかしていると言いたいわけです。僕はその人に「ちょっと一つ聞きたいけれども、あなたは働いていますか」と言ったら、彼は胸を張って「俺は働いている」。その後、聞いてもいないのだけれど、残業手当がこのごろつかない、ボーナスも減った、そんな話をし始めました。彼は、そんな状況でも俺は働いているのにあいつらは何だ、と言いたかったのでしょうか。

◆人はだれのために生きるか

私が「ではあなたは何でそんな残業手当も出ない、ボーナスもカットするような会社でなお頑張って働いているのですか」と言ったら、その人はすかさず「家族がいるからだ」と宣言されました。僕は思わず勝ったと思いました。何で頑張るか。人はやっぱり何のために生きるかだけではなくて、だれのために生きるかというのがあるのです。飯を食うために働くというのは、それはそうかもしれないけれども、彼にとっての労働の意義は家族だったのです。そこが外れたときに、縁が切れたときに金の切れ目が起こるのも、やはりまた事実だろうと思うのです。

金がないから友だちと遊べない、だから無縁化したのだというのも事実です。しかし一

方で、だれかと一緒に生きていないから働くことに一歩踏み出せないというところもあるのかもしれない。病気を治すこともそうかもしれません。やはりだれかのためにもう一回元気になろうと言っている人と、まあ何となく元気になろうと言っている人とは同じ薬を使っているけど治り方が違うのではないのでしょうか。

私はあの番組が終わった後、三宅さんに「いや、けど逆もまた真なりで、実はホームレス化がハウストレス化を招いているという面もあるんです。だからこれは両方とも一気にやらないとおかしな話になるんじゃないの」という話をしていました。総じてわれわれはホームレス支援からこういうふうに関心を持ってきてきたし、困窮のポイントも置いてきたという事です。

◆縁をつないでいく伴走型支援

そこで、ではそれに対して伴走型支援をどうつくっていかうとしたか。北九州ではすでにこのようなかたちでホームレス支援をやってきていて、国の社会保障審議会の特別部会でもこういう支援の仕方、伴走型支援が必要と言っています。この伴走型の支援、つまり第4の縁が築いていく支援、第1、第2、第3とうまく連携しながら第4の縁がコーディネートしていく支援、それを伴走型支援と呼びたいのですが、では伴走型支援のイメージ構築のときに、どういうふう考えたか。

これは一つの考え方で、家庭というものが持っていた機能とは何かということ仮説として置きました。

ちょっと断っておきますが、私はかつての家族社会はよかったと言うつもりはありません。このごろ60年代を舞台にした映画やドラマがはやって、オールウェイズとかを見ながらみんなが泣いていますが、本当にあのころはよかったのでしょうか。あれがいやで、みんな都会に出てきたのではないのでしょうか。だからあれにはもう戻れません。特に女性の方々はよくわかるでしょう。近代女性史の中で、たとえば親の介護は嫁の仕事だとずっとやってきましたが、やっとならば公に変わって今、社会化したわけですから、もうあそこに戻ることは想定していない。考え方として家庭とは何だったかという仮説を置いただけの話です。

◆仮説・家庭の持つ三つの機能

その仮説は、家庭には三つの機能が合ったということです。第1は受け皿的機能で、家

庭内サービスの提供です。食べる、寝る、着る、病気になったら看護してもらい、そういうサービスの提供です。

2 番目に置いたのが記憶です。家庭は記憶の装置だと考えました。小さいころから同じメンバーですと生活してきているので、そこには必然的に記憶の蓄積ができます。この記憶の蓄積は、単に思い出、経験というだけではなくて、この記憶の蓄積が現在起こっている事柄に対する対処の判断材料になってきた。たとえばお兄ちゃんが熱を出した。体に発疹が出ている。でもこの子は3歳のときに、はしかはしている。4歳で水疱瘡もしている。そうすると、はしかでも水疱瘡でもない。風疹じゃないか。そういう見立てに役立っていくわけです。この記憶の蓄積の装置だったことは、家庭にとって非常に大きいのではないか。

第3が持続性のある伴走的コーディネート機能で、家庭内のサービスでは収まらない家庭外のサービス、社会資源との連携を図ってくれたのが家庭なのではないか。たとえば病院はその最大のもので、家庭の中の看護では治らない。やはりこれはお医者さんのところに連れて行かなければいけないというところでお医者さんに連れて行き、治ったら戻す。つなぐ、戻す、つなぐ、戻すというその運動を持っていた。これが家庭だったのではないか。

私は家庭の持つ機能はこの三つだったと仮説を置いて、これで家庭がつぶれた、もしくは家庭が脆弱になっていくということで、では家庭に残る部分と社会資源として補う部分はどこかという議論を北九州で始めたわけです。

受け皿サービス機能に関しては、既存の社会資源が結構カバーし始めています。たとえばコンビニエンスストアは、単身者向けサービスを大きく始めています。ですから家庭内のサービスが社会資源に置き換わろうとしているのも事実です。介護事業はそれの最たるものでした。

しかしこの記憶の部分と伴奏的コーディネートの部分がやはり弱いのではないか。新たな社会制度を構築していくときに、この記憶の部分と伴奏的コーディネートというところに重点を置いた一つの仕組みをつくる必要があるのではないかと考えました。

記憶の部分は困窮者支援の現場でデータベースをどう構築するか。北九州では、本人の承諾の下、ホームレス状態に置かれた人たちのデータベースを今、市と一緒にできています。「ホームレス支援台帳」といって、2500人分ぐらいのデータが蓄積されています。家族がいないので、今までのケアの記録が全部、コンピューターに登録されています。

何かあったときにすぐに対応ができます。

二つ目は、サポートプランです。この人をどうサポートしていくのか、そのサポートのプランを立てて実行していく。家庭内では別にこんなものを文書化する必要はないのですが、赤の他人が関わるので、本人の承諾の下にどういうサポートをしていくかお互いに明らかにしていく。

三つ目は、伴走者そのものです。パーソナル・サポート・パーソンですが、伴走していく人をつくる。この三つを考えると仕組みにしてきたのが北九州の伴走型支援の一つの特徴です。

一つ戻りますが、私は今までの福祉の現場、困窮者支援の現場は、基本的には処遇の支援をやってきたと思います。この問題を抱えたこの人にはどう手当てをするかという処遇という言葉で、われわれ NPO でさえ結構使ってきました。これは確かに大切で、家のない人に家をどう設定するか、その処遇をどうしていくか。でも今からの支援は、もう一つの支援、存在の支援です。ともかく問題解決型だけではなくて、だれが横にいるかということ想定した、その存在の支援というところを、まさにホームレス時代の支援としては考えざるをえないと考えています。

◆「伴走型」の 15 のポイント

「持続性のある伴走型コーディネート」の 15 のポイントというのを考えてありますが、大事なことを一つ、二つ紹介しておきます。まず、受け皿とコーディネートは分離しようと考えました。処遇にまつわるサービス提供は、社会資源をつくることによってカバーしていく。社会資源が不足していることも確かにあるかもしれないけれども、私は地域の中に社会資源が結構あると思う。それをうまくコーディネートしながらつないでいく人がいない。かつて家族や地域がやってきたことができなくなっている。

ですからワンストップサービスは大事ですが、ワンストップで受け止めて、そこで全部のサービスまでしてしまうと、社会資源や地域が育たなくなりますので、そうではなくて、脆弱にはなったけれども家族もいるし会社も地域もあるわけです。そこをうまくコーディネートしながら使っていく。だから受け皿、つまりサービス提供とコーディネートは分けて議論しましょう。

◆「つなぎ」と「戻し」

二つ目は「つなぎ」と「戻し」です。つなぐという言葉は、困窮者支援や福祉の現場で「つなぎの福祉」などよく使われてきました。でも戻さなかったのが問題です。一番の問題は、今の貧困ビジネスに見られるような仕組みです。それぞれのステージは全部縦割りになってしまっているのです。たとえば病院から退院されるときに、医療ソーシャルワーカーさんが頑張ってつないでくださる。だけどその先、その人がいったいどうなったか、継続して追跡する人はいないわけです。

そのときに、たとえば貧困ビジネスの施設に置かれて、そして火事になってみんな死んでしまったみたいな話が次々に起こりました。次の伴走型支援の特徴は、戻せるかが勝負です。だめな施設からはちゃんと戻して、次の施設につなぐ。家族はそれをやってきたわけです。たとえばこの施設はいつ行ってもおじいちゃんのおむつがびしょびしょで替えた形跡がない、ご飯も冷えたのばかり出している、こんなところはだめじゃないか、おじいちゃんを戻してほかの施設につなげよう。これはとても大事なことでした。これを社会的にどうするか。

◆自分は何かの役に立っている！

あと伴走支援がなぜ必要かということを考えると、「存在意義の発見」がある。関係性の喪失は、存在意義を見失うことであり、そこには自己有用感が低下してきていることがある。北九州市立大学が自立支援センターに入る前と後のホームレスの人に行った意識調査があります。ホームレス状態の人に孤立感、一人ぼっちだということを感じますかと聞くと、「まあそう思う」まで含めると8割以上が孤独だと答えています。これが自立支援センターを出たとき、つまりわれわれの支援を受けた後で聞くと、4割ちょっとまで減ります。つまり孤独感は支援を受けることによって半減した。

次のデータは自己有用感の調査。自分はこの世の中、社会にとってなくてはならない存在だ、つまり自分は何かの役に立っているかという意識調査です。これを一般の市民に聞くと、約6割の人が自分は何かの役に立っているという意識を持っています。ところがホームレス状態の人は、3割。一般市民の半分です。ホームレスの状態の人は、自分が何かの役割を担っているという意識を一般の人の半分しか持っていない。

問題は、自立支援センターを出た後ですが、3割あった自己有用意識が、さらに減って、2割ちょっとになります。つまり孤独感は解消できても自分は何かの役に立っているという自己有用意識は、支援の仕方にとっては低下してしまうのです。手厚い支援は大事だけ

れども、いつも助けられっぱなしというのは、逆に元気がなくなる。助けるほうはどうぞと言いつける。助けられるほうはありがとうございます、すみませんと言わされ続ける。

この伴走型支援のもう一つのテーマは、困窮危機状態をどう脱するかが第1段階だけれども、その人が社会の中でどういう役割を担っていけるかというところまでのコーディネートができるか。助ける人と助けられる人が固定化しない、最近のはやりの言葉で言うと「絆(きずな)」です。絆というのは、何かゆとりのある人がかわいそうな人を助けていくという構図ではなくて、同時性が担保されなければならないと私は思います。

つまり助けていると助けられているが同時並行で起こることも可能である。もしくは可逆性、逆転できる可能性を持っていないと絆にならない。つまり助けられた人が助ける側に転ずる可能性を持っていないと本当の絆とは言えない。ゆとりのある人がかわいそうな人を助けているというかたちの支援をやっている限りは、この結果に終わります。

私はこのデータが出たときに、頭を殴られるぐらいショックを受けました。何とか手厚く、手厚くやってきたけれども、これで本当に良かったのか問われました。これからの困窮者支援は、やはりそういうところまで見据えないといけない。そうなるとやはり存在の支援というところは非常に大事になってくるのではないかと思います